

## 焼走り溶岩流と自然の力

焼走り溶岩流は 1732 年に起こった火山活動の結果です。岩手山北東斜面の海拔 920～1,200 メートルの間で複数の割れ目から溶岩が噴出し、山を約 3 キロメートルにわたって流れ落ちました。この溶岩流は、一番広いところで 1 キロメートルの幅があります。観察路周辺の地域では、溶岩流は 5～10 メートルの深さがあります。

焼走り周辺でみられる岩石は、握りこぶしくらいのものから直径 1 メートルのものまで様々な大きさをしています。含かんらん石紫蘇輝石普通輝石安山岩である個々の岩石はそれぞれ重さも手触りも違いますが、これは主に風化の仕方の違いによります。溶岩流の表面温度は、夏は 40℃まで上がる一方冬は -20℃まで下がり、過酷な環境を作り出しています。

日本では溶岩流は比較的良好に見られますが、焼け走りはいくつかの理由によって際立っています。ひとつには、正確な噴出の時期が明らかであることが挙げられます。また、この溶岩流は大きな地形的変化を経験していません。さらに、噴出から 300 年近く経つにも関わらず、焼け走り溶岩流はいまだあまり植生を有しておらず、溶岩流の岩には苔類や地衣類、少数の維管束植物が生息するのみです。その結果、焼け走り溶岩流は噴出時とほぼ変わらない状態を維持しており、科学者にとって興味深い研究の対象となっています。